

特32

562

情事  
村井  
静馬  
編輯  
明治  
太平  
記

初



特32  
562

村井靜馬編輯  
鮮齋永齋書

# 官許明

類國史  
屬神史  
冊四十二  
函六

# 記全

東京書林

延壽堂北發兌

天下の曲變遷も亦や諸子の忠憤も亦と雖も原是時運  
の然らばも知らず余を元弘建武の役も天竺島時が暴を  
征まればも延原の藤房の賢向の武臣も新田補等も  
ども又足利の評を鐵も或得き近時伏見の本も於る一且  
錦旗も砲落せりも関東速くも非非を悔て謝罪の实效を顯へ  
し其属奥村總野も在りて姑く官軍も抗せりも後終り順も  
歸り四弊廢止之開化も進み衆庶腹を鼓して太平を樂む  
是聖運の至れる処に因て少く其邊の事迹を記して如童も示す

官許明治八年三月廿七日

村井靜馬記



特32  
562

明治八年

村井靜馬編輯

鮮齋永菴書

# 官許明

類國史

類國史  
屬御史  
冊四十二  
函七

第三卷

# 記全

東京書林 延壽堂北發兌

天下の變遷は諸子の忠憤より出ると雖も原是時運の然りたる処に介を元弘建武の役は天皇高時が暴を征まじき延臣の藤原の賢より武臣は新田補等何れども又足利の逆を鐵は得ず近時伏見の一番は於ち一旦錦旗は砲發せしも関東速く非非を悔て謝罪の实效を顯し其屬奥羽總野は在りて姑く官軍は抗せしも後終は順に歸りて弊廢止る開化は進み衆庶腹を鼓して太平を樂む是聖運の至れる処に因て少く其邊の事迹を記して幼童に示す

官許明治八年三月廿七日

村井靜馬記

明治八年三月廿七日



徳川内府公



徳川内府公





鳥道と徒旗を  
羽一り等し  
街賊錦を砲



田原の陣



田原の陣



# 卷之壹

慶應三年の冬、徳川内府大政を奉還  
 せしより起り、明治元年正月六日、伏見の戦  
 遂に敗れ、東軍大坂へ走るに終る

# 卷之二

前同時、徳川氏伏見の敗潰、  
 軍鑑し乗じて浪花を走るに起り  
 大島圭介等の脱兵、総野二州の間  
 於て大いに官軍と接戦するに終る

## 明治太平記初編卷之一

東京

村井静馬編輯



上古の事、姑くあはて神武天皇御世を治りしより  
 以来、皇統一姓に在りしを、大政総て王室より出づと言ふ  
 事、  
 一、頼朝相州蛭ヶ兒島に起りて、義仲を討  
 一、平家を西海に沈めしより、國家の政權、武家に  
 至り、北條の暴戾、足利の兇惡、遂に天下ハ麻の如く  
 一、偶織田氏の英傑あり、豊臣氏の胆略ありて、全国の



乱を威腹させし又徳川の暴祖家康あり人最も勤  
 王の志気厚く四民に仁恵を施すなりを昇平二百  
 有餘年靡るぬ草木もたまたまのうら国権は尚武家  
 天子を生る神の工くまを尊敬するまことと  
 雖も皇威は更し震はざりし既し嘉永癸丑の年  
 米利加の使船渡来せしより幕府等もよく事  
 過ち慷慨の義士等世に顕われし大つは王室の佐  
 けをたし大政復古をさしめんと頼りし尽力し及び

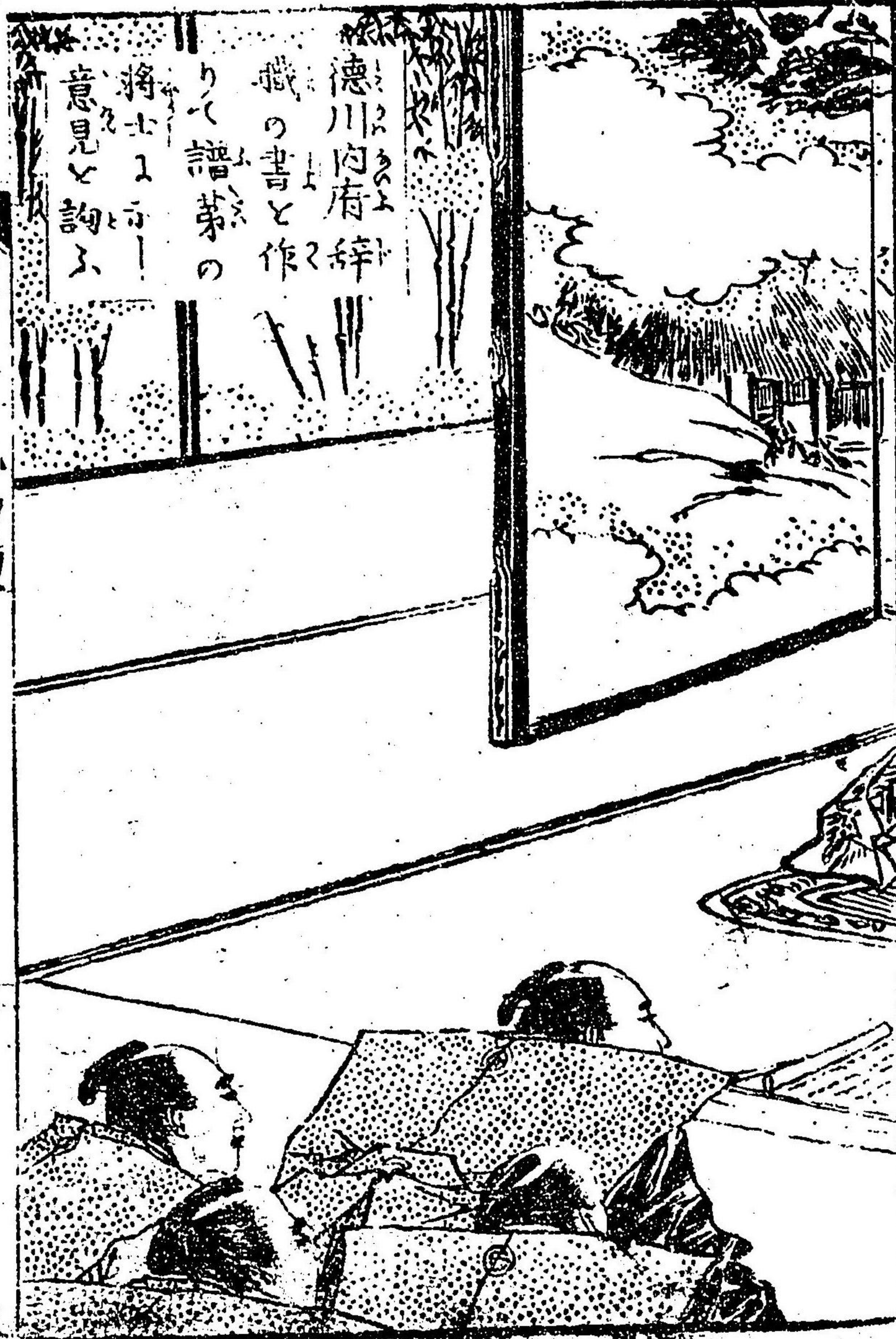
朝威も日々に熾んまり幕威は漸次よかるとして  
 大藩よりつらつら幕命を奉げぬも多く徳川譜第  
 の藩よもいさゝか苦慮する者も少くは此れ徳川  
 十五世の武將内府慶喜と称するは頗る英敏の所へ  
 たり時よ山内容堂なる人書を徳川家に捧げり曰く  
 中古以来政刑武家よ出るといふも洋船渡来あり  
 種々内用よ物論生じ終し外人の侮りと受る  
 朝廷幕府と政令の二途より出る人をも以て天下の耳目



を異ことにされをあり今や時勢一変あり只旧規ふるまひの  
 守まもるべしと政權を王室ていしつに還かへり萬国並立の  
 基礎を立んと是當今の急務なるべし尚も御賢  
 慮しるありと最懇ろに認めたる後其臣後藤象  
 次郎等らに持せしむ將軍家よまのりせしめ勸めん政柄  
 を解とけあめんとせり是よりよく將軍を深く思ひ  
 遠く慮おぼふに迎むかへ是迄の姿よく治さまらざるべし  
 べし察みり大政を朝廷てうていに還かへり奉らん赴おもむが講第の

將士しやうしに談だんぶるよむ會津をなめり將士の面々大い  
 おもひ成なりて心こころ中ちゆうそむ意いに服くせざれども陽ひかりに拒かむ  
 吏しを得えず然しかるるよむ昔むかし答こたへしを徳川内府も決心  
 せられ慶應三年十月某の日書を朝廷てうていに奉まりて  
 將軍職を返さんと請こはる仍なほも朝廷てうていを許ゆるし尚  
 も諸藩の意見を詢とる此と徳川家恩顧の諸藩  
 或ハ輕易かろに政を執とるとふく姑なほも内府ないふに御委任ごにんあり  
 くと然しかるるよむ建自けんじよ及およべを朝廷てうていにまづ選せん疑ぎせ





徳川内府  
裁の書と作  
りて譜第の  
将士一  
意見と詢ふ



徳川内府



られぬ然るに徳川内府の尹の宮且つ二條関白と最も  
 親と深き故に徳川の僚属等関白家と密議を合  
 仍て朝議の決しごとしと言ひ出る者ありしは是より  
 正義の朝紳及び薩州上州をとりて藤七復古の議と起  
 きて諸藩王等相議して云く天下の吏稍定まらんとして  
 朝議斯のいごとしハ機を失ふべしと何とぞ  
 大のよ奮發ふし激論をりて朝論を動し更に十二月  
 九日下平り遠うは朝命ゆきせられり會津の九門宿衛

を罷め薩土藝の三藩あれは代り尹の官且つ二條家と  
 存け関白及び幕府の職を廢して依りて總裁議定  
 參與の三職を罷き宮及び公卿諸侯藩士等をして  
 其職に任つて以て諸政を掌ごしめ且つ令し  
 云く今より一々士小の政務盡く朝廷より出れば四方  
 其之を體せよとあり是より先毛利家より故のりて入  
 京を禁つられ三條家以下六卿もも勅勘を蒙られ  
 て久しく長州に在りしが固より正義誠実より皇國を



られぬ然るに徳川内府の尹の宮且つ二條関白と最も  
 親と深き故に徳川の僚属等関白家と密議を合は  
 仍く朝議の決しごとくと言ひ出る者ありしは是より  
 正義の朝紳及び薩州上州を名どめ薩を復古の議を起  
 せ諸藩士等相議して云く天下の吏稍定まらんとして  
 朝議斯のどとあるは機を失ふに至るべしと何を  
 大の奮發あり激論をのりて朝論を動し更に正月  
 九日より平り速うに朝命ゆきせられし會津の九門宿衛

を罷め薩土藝の三藩あり代り尹の官且つ二條家を  
 斥け関白及び幕府の職を廢して依りて總裁議定  
 參與の三職を置き宮及び公卿諸侯藩士等をして  
 其職に任じし以て諸政を掌ごしめ且つ令し  
 云く今より一々大小の政務盡く朝廷より出れば四方  
 其之を體せよとあり是より先毛利家より故のりて  
 京を禁じられ三條家以下六卿もも勅勘を蒙り  
 て久しく長州に在りしが固より正義誠実より皇國と

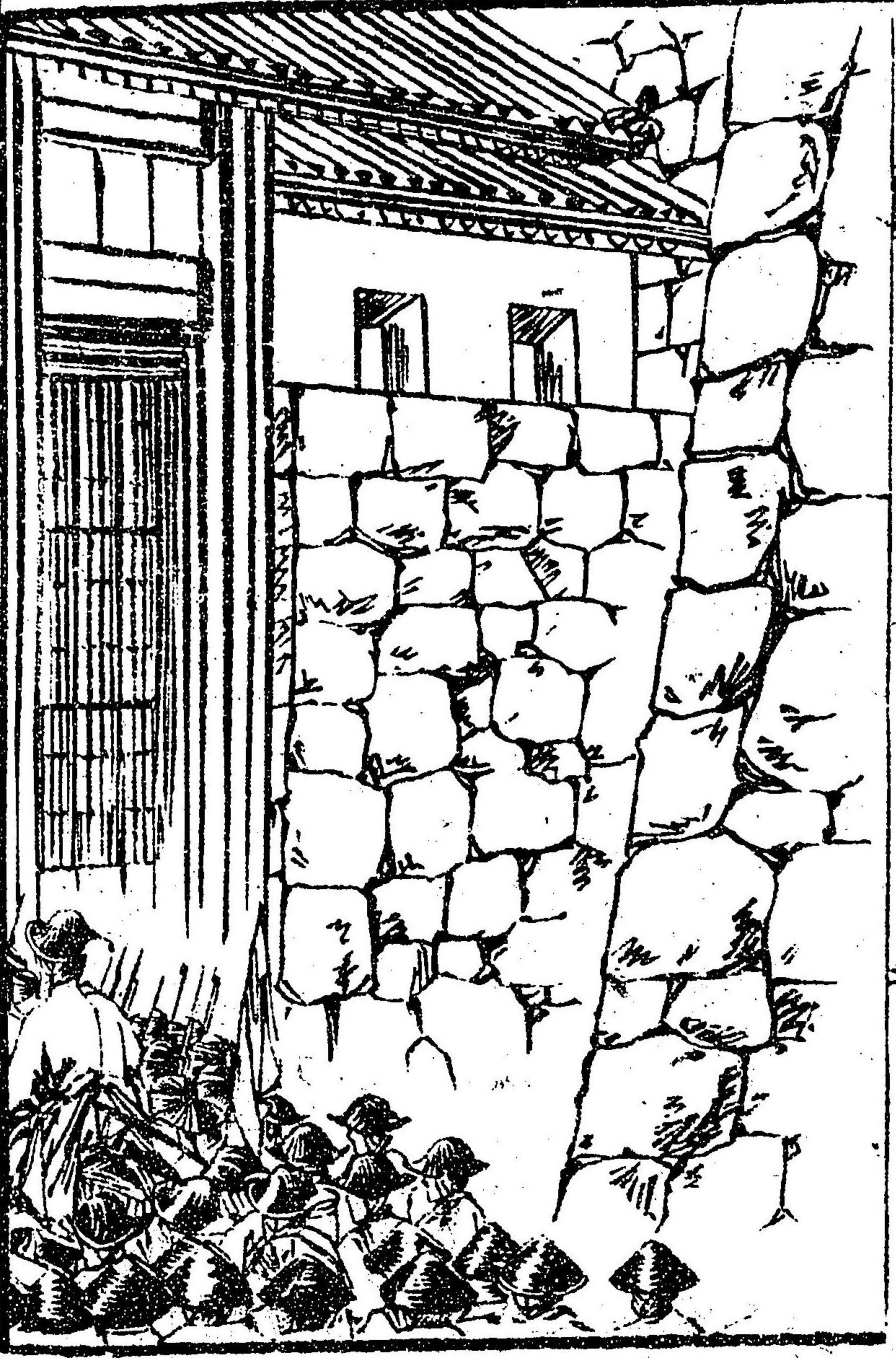


思ふ赤心より事起りたる訳を遂に朝疑氷解  
 しく毛利家且つ六卿も此頃京師に召さるる  
 原の官爵を復せしむる程に徳川内府の  
 九日の朝命を聞くより心中をなやめ駭くは  
 悲望を懐くの意あり仍る會津以下譜第の將士を  
 二条の城に召集め相議し言ひつゝやう既に此程  
 將軍職を辞退し及ぶとつゝも全く国事は關係を  
 致さるるの身かよらうに然るは九日の朝命出ると斯の

如き大事件を我に一言の詢もなく突然とて令を  
 出はる是必らば幼帝を騙りて夏を謀る者なりと  
 覺ゆ果しく然る事なり於て又是天下の一大事な  
 れを阿容くこととて在るべきありげ我まの事を執る  
 べし其趣きを申し述べ再び朝廷に上書ありしを  
 既に内府政權を朝廷に奉還為さるる又此表の出  
 たる後世の人たゞ疑へり是より仍る薩長等の諸藩  
 非常の備へを嚴重しとて同く宮闈を守護するを



朝議の叟  
きく川譜  
く徳川譜  
第の將士  
二條の城  
一據る



朝議の叟

朝議の叟



徳川譜第の將士等ハ其のく二条の城ヲ據リテ相對  
するの勢ハゆるみぞ洛中騷擾なるに諸藩のちち  
方向ハ悩めるも其を憂るべし余れハ徳川の將士等  
或ハ内府ヲ勸め曰く事已ハ斯のごとク形勢ハ至  
るくハ奈何ある變のゆらんも知とび居るがう畏  
掛らんより浪花ハ京師の咽喉の地をなれば互しく大  
坂の城ヲ據りと事を圖るを上策ありんと爰ハ於て  
内府も然るべしと思ひ置らん臣下の暴動を鎮むる

たれ下坂のいふと唱へたる一通の書を朝廷より置ま  
會津素名の兩藩をとりて閣老板倉侍後等と共に  
各兵士を従へり同月十二日の夜より俄然大坂に  
下られたり朝廷あれを聞て召され其舉止の異ありと  
察し會津素名兩藩の入京をせん禁ぜらる斯り  
後ハ事もなく姑く時日を送る程に京師におつて  
議定參與等相もの謀りて曰く今既ハ王室  
おのく政を執るといふとも費用も充べし物のゆゑ







内府も心決して遂に會桑兩藩をめてあれを先  
 驅とす。つとも入京せよと事極まるみぞ此度速く  
 花洛に聞て驛動のりとも大方ありて朝廷  
 薩長の兩藩の兵を洛外に出し伏見鳥  
 羽兩道の関を塞ぎ内府大軍よく登りんとす必  
 ず関内に入るとし。殊に會桑兩藩のてたハ豫  
 入京を禁となり。渠等先隊に進むに於てハ違  
 勅の罪を負ひて終を機に臨み變に亦して處置をせ

むき肯命トらるれを薩長の兩藩より許多の兵を  
 引俱してめの兩道に走向に防禦の備へ嚴重あり  
 時よ明治元年正月三日徳川内府入京ゆくと佐久  
 間近江久保田備前等々三兵隊を引率なきにあ  
 高松濱田をとりめと其餘譜第の諸侯をのりて  
 應援の兵とす。會津赤名を先鋒として伏見鳥羽の  
 兩道より大軍陸續と進み来るに固く関門を閉じ入  
 れぬを徳川家より使者を送りて関を通らざるを



東軍使者  
を  
送り  
過  
り  
て  
論  
を  
成



目録の二七

目録の二七



詰と成兵更之を許さば種々論議及び一々  
 件の使者の言へるや寡君朝命を被りて今入朝  
 及べし和殿等敢て拒むとならば此上も是非及  
 び兵を用ひて過らんと云ひ捨て退きしが既  
 しく徳川の大兵忽ち関門を通るふぞ京軍事の  
 急まるを見と大砲を發し防ぎ程も東軍よりも  
 銃を放ちて稍撃戦及ぶるぞ砲声山野に響き渡  
 る最まさきトキマ形勢もまろや先隊も兵端を

開きたりと覺しを進めや者ともと働合ひと東  
 軍漸次も押菟もバ京都方より薩長の兵上等以  
 揉も追崩せと最も烈しく討たたりや道東軍  
 找りし前隊乱れ敗走せり此も伏見も火の  
 起りし民家熾んも燃ゆも此機も乘りて関  
 東勢も又兩道より攻上り是非も入京もさんと  
 京軍も追退ると双方憤戦時を移せを死傷の  
 者も尠らば兎角も日昏も至れバ兩軍合



引よ兵を上る如く休息よ及ぶ程よその夜三鼓よ  
 及べる頃、のゆく京軍より入まはくとその一つの  
 間者立飯りよ只今東軍下鳥羽より夕飯を支度せ  
 りと注進よおよびて先や其虚を撃んとて京軍不  
 意よおし寄せて襲撃する急なる故東軍大い狼  
 狽ふし兵器を棄て散せしむ此とて関東方遊軍の  
 兵夫と見らるる援りしを敗兵あまし勢ひ成得て各  
 返り戦ふもよ京軍あましが為し乱れ立ちしを隊長

市木某等頻りよ兵士を激しし自ら真先よ馬と進  
 り勇を振ふる戦ひし東軍再び破れし然れ  
 ども市木をたよめ京軍多く討死為たよバ鮎て兵  
 を引りしを斯て四日る辰の刻より西軍鳥羽  
 伏見の両道より又血戦よ及ぶ程よ豫て京軍の  
 方よりハ散兵を數十人鳥羽街道の傍ある高草  
 の中よ伏せおはし敵の来る所窺ハし東軍よ  
 是れ知らむし大挙たりし両道より逼れば



此と総督仁和寺の

宮より錦の御旗を

真先よおし立

諸軍を指揮

して進まざるを

関東の賊軍ども

更し憚る気色もさく

打火と弾丸の既し錦



旗し中るきを勢ひ猛く

攻寄せたる時分とをのり

京方の伏兵かの高草の裡より

賊軍の中央を目がけ一時は撃ち

砲玉ハ雨を注ぐよ異あつて

賊兵大よ駭きと斃る者数

知らぬ此機よ衆ども本道の

官兵頻りよ奮激をりつと餘一のせと攻め



とを賊軍遂に堪り得ず鳥羽の人家に火を放ち  
辛く淀をも退り此日賊將佐久間久保田等以下  
数十名討死し官兵もまた加治木以下死する者最  
多のりき備五日より早天より官軍淀より来り攻む仍  
と賊兵橋を隔り頻りに防禦の手を尽くせば官軍  
もまた川向ふより大砲数發はげさぬに淀城目  
かけく打掛たり此とを賊軍方畧を設け槍隊凡  
百人をのりてを芦の茂りし中より伏し更にも小銃隊

を出して敵を四引寄んとし官兵速くも伏兵の  
動き動静を察せられを懼りし兵士強進ませる只  
砲戦の時を殺すを隊長石川某あり者大に声を  
焦燥く敵に伏兵ありとを弁を博試く機を失ふ  
と世の物笑ひぬ奈何よせん我よつげと言ひつゝ  
砲手数人を引俱しと直ちに橋を渡り越し群  
敵に撃てかるとは官軍大に奮ひ立ち夫石川を討  
とると先を争ひ進みたり時分はりと賊の伏兵左





東軍  
遷官  
兵定  
城



右の芦の茂より忽然と露ぐれ出槍先揃へく突く  
 鬼れと豫る期たる支ふまは石川某些をも臆せき  
 左右よりつて戦ふむと賊の銃隊大つに至りく透間  
 も存らせまき打立りく遂に先鋒石川等ハ弾丸よ  
 中りく斃となり亦れども隊長柳田伊集院その  
 他勇猛の兵士等が頼りよ味方を励みしつ死憤の  
 色を顯はりく無二無三進りくを賊軍あまを  
 支一煎く散々討ふられ堪へず大敗軍となり此

日午の刻に至る頃賊兵は退き橋本におん至  
 りしとき時津藩東軍の為山崎の関を守り  
 折くく天使山崎に至りく順逆の理を陣諭す仍  
 津藩命を奉とく官軍順ひを賊軍いしむ  
 みを知らず既六月の早天より官軍橋本  
 押寄せし賊軍も兵を出し稍戦争  
 及べるとき津藩忽ち山崎より賊軍の陣營に大砲  
 數發ち鬼し思ひ設りぬ支ふる火賊徒等

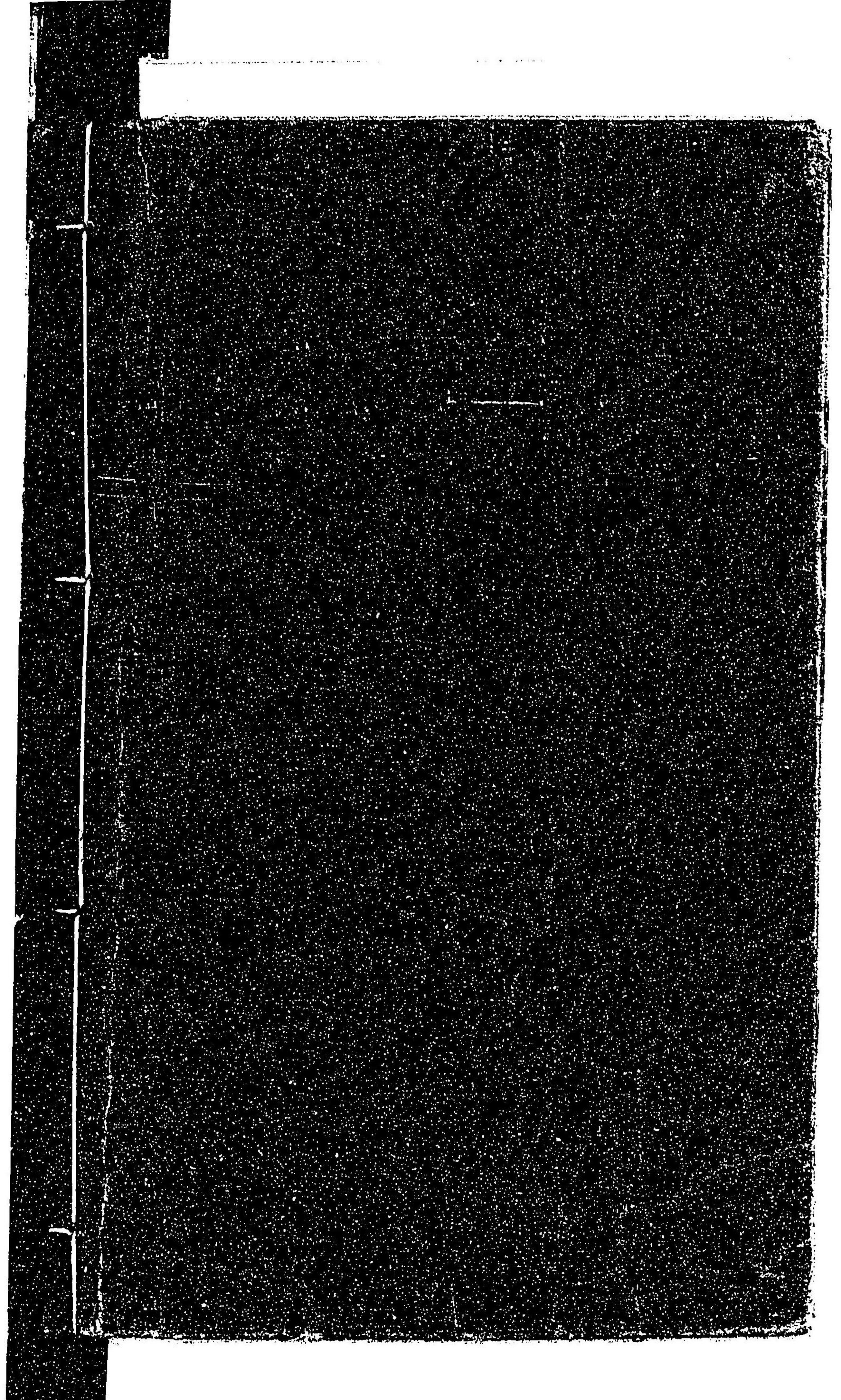
月台ノ下ノ巴ノ編



大<sup>おほ</sup>に<sup>い</sup>狼<sup>お</sup>狽<sup>う</sup>と<sup>い</sup>討<sup>う</sup>つ<sup>者</sup>數<sup>あ</sup>を<sup>知</sup>ら<sup>ず</sup>一<sup>つ</sup>軍<sup>ぐん</sup>崩<sup>お</sup>れ  
 立<sup>た</sup>ど<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>へ<sup>本</sup>道<sup>の</sup>官<sup>くわん</sup>兵<sup>へい</sup>勝<sup>か</sup>つ<sup>乗</sup>ト<sup>く</sup>頻<sup>あ</sup>り<sup>追</sup>撃<sup>げき</sup>  
 あ<sup>ら</sup>り<sup>し</sup>の<sup>心</sup>を<sup>失</sup>つ<sup>た</sup>猛<sup>まう</sup>と<sup>も</sup>や<sup>ま</sup>と<sup>も</sup>盛<sup>さか</sup>返<sup>かへ</sup>ま<sup>さ</sup>か  
 る<sup>て</sup>遂<sup>つひ</sup>に<sup>賊</sup>兵<sup>ぞくへい</sup>總<sup>そう</sup>敗<sup>たい</sup>軍<sup>ぐん</sup>と<sup>あ</sup>り<sup>て</sup>大<sup>おほ</sup>坂<sup>さか</sup>へ<sup>と</sup>走<sup>は</sup>り<sup>け</sup>

明治太平記初編卷之一終







特32

562

091471-001-7

特32-562

明治太平記

村井 静馬/編

M8-13

DBN-2391

